



名大トピックス

No.130 平成16年3月31日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Te(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

総長及び副総長の退任のことば

6年間の総長時代を振り返って

総長 松尾 稔



学内外のご関係の皆さま、特に名古屋大学構成員の皆さま、私は来る平成16年3月31日をもって名古屋大

学総長の任期6年を満了し、退官となります。日本の国立大学にとっては、法人化を睨みつつ、この6年間大改革、大変革の時代、それは明治の学制発布、第二次世界大戦敗戦後の新制大学の発足に次ぐ第三の大浪、まさに「激動の時代」というに相応しい時期でした。この6年がどういう時期であったかは、後に歴史が判断することだと承知しております。とは言え、私には皆さまの、当初はやむなく外発的な、しかしそのうちに力強い内発的、献身的な努力と協力に基づく改革により、それまで“眠っていた獅子”ともいうべき名古屋大学が、モコモコと動き出し、立ち上がろうとしているかにみえます。皆さまのご尽力に心からお礼申し上げます。

外国からの留学生を含む多くの若き学生たちや、同僚と言うべき教職員の方々はもちろん、同窓会を通じての多くの先輩や各界の人々、さらには大学運営に多

CONTENTS

- | | |
|---|----|
| ・ 総長及び副総長の退任のことば | |
| ・ 松尾総長「6年間の総長時代を振り返って」..... | 1 |
| ・ 奥野副総長「副総長退任に寄せて」..... | 6 |
| ・ 伊藤副総長「名古屋大学の皆様に感謝して」..... | 8 |
| ・ 佐々木副総長「退任に当たって 思うこと、そのままに」..... | 10 |
| ・ 後藤副総長「名古屋大学の新しい発展に向けて」..... | 12 |
| ・ 個別学力検査が実施される..... | 14 |
| ・ 地下鉄4号線砂田橋・名古屋大学間開通記念コンサートが開催される..... | 16 |
| ・ 東海・北陸地区地域貢献シンポジウムが開催される..... | 17 |
| ・ 平成15年度名古屋大学卒業・修了留学生を送る夕べを開催... | 18 |
| ・ 太陽地球環境研究所が海外で初めての国際会議を開催..... | 19 |
| ・ 年代測定総合研究センターが第16回タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催..... | 20 |
| ・ 地球水循環研究センターがアジアの水循環に関する衛星データ利用ワークショップを開催..... | 21 |
| ・ 大学院多元数理科学研究科が韓国高等科学院数学部と学術交流協定を締結..... | 21 |
| ・ 博物館が第30回特別講演会を開催..... | 22 |
| ・ 農学国際教育協力研究センターが第4回オープンセミナーを開催..... | 22 |
| ・ 平成15年度名古屋大学語学研修が終了..... | 23 |
| [INFORMATION] | |
| ・ イベント等の開催予定一覧..... | 24 |
| ・ 本学関係の新聞記事掲載一覧(16年2月分)..... | 25 |

大のご指導をいただいた運営諮問会議の先生方等々数え挙げるときりがないほどの多くの素晴らしい人たちと巡り会え、かつご指導、ご鞭撻を得られたことは、私個人はもちろん大学にとっても誠に幸運であったと、心から感謝しております。

長い、優れた伝統を担いつつも、良い意味で、“最近名大はすっかり変わりましたね”と言って下さる多くの方々がおられることは、“ハナシ半分”としても素直に大変嬉しいことです。これは全て、大学構成員の皆さまを初め、同窓生やご関係の方々のご努力のお陰であると、心から感謝しております。特に、大学構成員の皆さまと歩んだ6年、法人化という外圧があったとはいえ、これを良い方向への契機として、種々“内発的”にお考え下さり、改革へと皆さま自身で導いていただいた成果であると、よく承知しています。自信を持つことと、自惚れとは根本的に異なることを充分理解した上で、“名大の存在感が高まった”と言われることに対し、素直に喜ばましよう。

野依先生のノーベル化学賞を初め、立派な賞を受賞された数多くの方々がおられます。13件にも上った21世紀COEプログラムの採択、国際学術コンソーシアム（AC21）の発足、800人もの方々が参加して下さった「東京フォーラム」、七大戦優勝を初めとする体育会の目覚ましい活躍、後にも触れる数多くの新しい組織や建物の新設及び改修などを、素直に喜ばましよう。名古屋大学の、正にその中央に地下鉄「名古屋大学駅」ができ、かつ、“学内の風景が（きれいな方向へと）すっかり変わった”と言われることも嬉しいことの一つです。全学同窓会が創設され、財界その他多数の分野で同窓生や名古屋大学関係者の活躍が目立って多くなってきたことも大変嬉しいことです。

さて、今は、（と言っても、この文章を書いている時ではなく、「名大トピックス」に出た頃）、本当に「ホッ」としています。何故なら、この数年間は、私にとっては、肉体的にも精神的にもこれまでの人生の中で最もつらく、常に Pressure とストレスに悩まされ続けてきた年月だったからです。どのようなことを

Pressure と感じていたか、そこから解放されることが、私にとってどれほど待ち遠しいことであったかを、部分的に綴らせて下さい。ただしこの場合は、私的な日記を書くところではありませんから、「表題」から離れないよう、公的なことに限って書くことに努力いたします。

旧設七大学の中でも、名古屋大学は、他の旧設大学や地方大学と同様、東京大学、京都大学とは著しく異なると思っています。本学が全国区の大学であることは言うに及びませんが、地元との連携や協力、平たく言えば地方との“お付き合い”は当然です。当然ではありませんが、質・量・時間において大変な努力を必要とするのもまた事実です。椎貝元山梨大学長（現文部科学省大学評価委員会 国立大学法人分科会長）は、“地方の大学長は、いわば副知事のようなものだ”と公言されていました。大学所在地には、普通、各中央省庁の出先機関（本省所在の東京、特殊事情の京都を除き）のほとんどが、また県庁、市役所はもちろん、財界の地方本部もあります。必然的に、地元における委員会その他各種会合や行事、教育研究に関する協働作業が沢山生ずることは、想像、もしくはご経験のとおりです。ただし、それは押しつけられることではなく、むしろありがたいことであって、国際公共財であるべき大学の一側面として、まず地元との協働活動は必須・不可欠、大変重要なことだと考えるべきであります。

例えば私の場合、全国区的には、文部科学省、経済産業省、環境省、国土交通省等関連のもの他、学会会議会員、国立大学協会副会長・常置委員会委員長、総合科学技術会議専門委員等々が、また地元では中央省庁の中部・東海地方局や愛知県、名古屋市等の委員会委員や委員長その他を務めさせていただきました。当然のこととして、私は非常勤・無報酬であります。因みに2月1日現在で、文部科学省の許可を得ている「兼業」等が約60件、うち委員長・副委員長等は10数件であります。

先に「Pressure からの解放の視点」で書いてみたい

と申しました。もちろんその意味では、個々に一所懸命やってまいりましたが、上記の件のほとんどから解放されるということは、私にとり、大変ありがたいことです。「Pressureからの解放の視点」と言っても、その切り口はいくらでもあります。そこでこの6年間の仕事を象徴的かつ具体的に示す事項をいくつか取り上げ、以下に書いてみます。決して自慢ではありませんから、誤解の無いようお願いいたします。なお、「総長」が同時に「教授」であることは、当然のことながら法律的にも、時間的にも、(普通は)能力的にも不可能でありますから、以下の項目は、全て学内外の研究教育行政に関することとお考え下さい。

(a) 出張:「総長」としての出張ということになります(学会関係は休暇となりますので、これに関する出張はあり得ませんので)私は徹底して海外出張は控え、海外大学の祝賀式典などはほとんどを副総長に代行していただきました。国内出張に限っても、あちこちありますが、「東京」出張だけについて書いておきますと、この6年間で349日間です。国大協の総会のように2日以上にわたることもありますので、上述のうち「東京泊まり」が129日ありました。

(b) 挨拶:かつて山下興亜元副総長が本に著しておられましたが、各種挨拶は大変なPressureでした。私のような人間が、「原稿なし」でやれるわけがありません。土曜日は何かと行事にとられましたから、貴重な毎日曜日はもちろん、いつもいつも、原稿作りに追われる状態でした。“どんな時の挨拶が?”とおたずねですか。もう、ありとあらゆることです。例えば学内的には、名誉教授称号授与式、OB職員懇談会、年頭の挨拶、全学及び各部局同窓会、永年勤続者表彰式、国際会議・シンポジウム、留学生歓迎会・送別会、留学生特別コース入学式・卒業式、各部局の創設何周年記念式典、新設組織の創設記念や新設(改修)建物竣工式典、他大学の記念式典や祝賀会、等々です。平均しますと週2,3回はありましたから、1年で120回以上、6年で少なくみて700回は挨拶に立ったと思います。因みに、この6年間の新設の組織と建物だけ、後に表に

しておきますので、嫌味にとらずに、一つの参考資料として見ておいていただければ幸いです。

(c) 原稿: 沢山書かねばなりませんでした。代表的なものは入学式、卒業式・修了式(学部と大学院、当初3年間は医療技術短期大学も含め - 要するに30分モノを毎年4編あるいは6編を - 前年の秋頃から取りかかりました。トピックスにも出ていますので読んでいただければ、本当に嬉しく思います) また大学構成員への情報公開の重要性を痛感しましたので、だいたい毎月1回“総長だより”を書いて、ホームページに載せていました。名古屋大学ホームページを開いてもらえばいつでも見られますが、これまでに通算No. 63まで、総ページ約320に達しています。“総長だより”は学内向け限定のホームページに載せたのですが、他大学にも相当に出まわっていました。また、学内外を問わず各種出版物や雑誌類にも、総長として断れずに随分書きました。もちろん、学問としての私の専門分野のことではありませんので苦労いたしました。

(d) 行事: 先の挨拶や原稿とも連動しますが、これらの準備もなかなか大変でした。学内の定例行事で、まず挙げるべきは、月1回の組織改革検討委員会・部局長会・評議会でしょう。さらに、入・卒業式、全学同窓会、名誉教授称号授与式、OB職員懇談会、体育会、各種式典など、体調も崩さないよう注意が必要でした。AC21の第1回「名古屋大学国際フォーラム」や「AC21理事会」も、本学としては大変大きな行事で、印象深いものでした。学外のものには枚挙にいとまがありませんが、定例的なものとしては、例えば「愛知学長懇話会」、「七大学学長会議」、「東海・北陸地区国立大学学長会議」、「国立大学協会理事会・総会・常置委員会」、中央省庁並びに愛知県や名古屋市関係の大きい委員会等です。国際的なものとしては、大学間の学術交流協定が何度かありました。

(e) 会見やインタビュー: 記者会見は定例のものとは単独のものを、企画広報室の計画に従い、準備をして臨みました。野依先生のノーベル賞の時は私自身が興奮していました。TVのインタビューにも何度も応じ

ましたし、放送局に出かけてのTV 討論会やインタビューにも出ました。平成13年12月13日（放送15日）の、当時の遠山文部科学大臣を中心にした片山鳥取県知事、生駒日本TI（テキサス・インスルメンツ）社長との80分に及ぶNHKのTV 討論会は印象深いものでした。学長や政府要人等の外国からの訪問者との会見にも、準備と気配りが必要でした。

もう十分書かせていただきましたのでまとめにしたいと思います。

まず私は、名古屋大学の存置価値とその理由を考えるとところから始め、長期目標・理念とも言うべき「名古屋大学学術憲章」の制定に合意を得て、皆さんのご理解とご協力のもと、それに基づいてここ数年の（私に言わせれば短期目標・計画と言わざるを得ないのですが）アカデミックプランを策定し、その実現に努力してきました。ご不満も多かったと思いますし、道半ばのことももちろんありますが、一所懸命やったことだけはお認め下さい。

私は、43年にも及ぶ長い国立大学生生活を送らせてい

ただきました。最初の10年は京都大学の助手・講師・助教授でしたが、あとの33年は名古屋大学で過ごさせていただきました。生まれは京都ですが、名古屋及び名古屋大学は第二の故郷であり、愛着も愛情も人一倍と自負しています。法人化という、国立大学にとって第三の大浪の中、真に優れ、かつ環境の変化に適合しうるものだけが残るであろう時代に入ってきました。野依先生を初め、いろんな人が“ No .1ではなく、Only 1こそ最も大切” と言っておられますが、そのとおりです。最近の「リクルート カレッジマネジメント」124号にもありましたが、名古屋大学の存在感は急速に増大しています。自惚れと自信を峻別しつつ、楽しい職場、学習の一流の場としての名古屋大学へとさらなる発展を遂げていただくよう皆さまに心からお願いし、併せてこれまで私を支えて下さった6年間のお礼いたします。

ありがとうございました。

（平成16年2月執筆）



名古屋大学国際フォーラム総会（平成14年6月24日）

総長在任時の主な組織・施設整備等

年度	組織整備	施設整備
平成10年度	第11代総長就任（任期4年） 医学研究科大学院重点化（3-1） 生命農学研究科大学院重点化（3-2） 国際言語文化研究科新設 物質科学国際研究センター新設 情報メディア教育センター新設 高等教育研究センター新設	医学部附属病院病棟（期）竣工
平成11年度	医学研究科大学院重点化（3-2） 生命農学研究科大学院重点化（3-3） 法学研究科大学院重点化 農学国際教育協力研究センター新設 附属病院光学医療診療部新設 （学内措置）核燃料管理施設設置	工学部1号館竣工 共同教育研究施設総合研究実験棟竣工 （改修）農学部東研究棟竣工 （改修）農学部5号館竣工
平成12年度	医学研究科大学院重点化（3-3） 文学研究科大学院重点化 教育発達科学研究科大学院重点化・名称変更 経済学研究科大学院重点化 博物館新設 年代測定総合研究センター新設 併設型中学校・高等学校の新設（併設型中高一貫教育） 附属病院リハビリテーション部の新設 （学内措置）評価情報分析室設置	教育学部附属総合情報教育棟竣工 留学生センター竣工 IB電子情報館（北棟）竣工 アジア法政情報交流センター（寄附工事）竣工 （改修）理学部A館竣工
平成13年度	環境学研究科新設 医学研究科修士課程（医科学専攻）新設 環境量子リサイクル研究センター新設 発達心理精神科学教育研究センター新設 地球水循環研究センター新設 大気水圏科学研究所廃止 （学内措置）学生相談総合センター設置 （学内措置）附属図書館研究開発室設置 （学内措置）教養教育院設置	医学部校舎1号館竣工 文系総合館竣工 インキュベーション施設竣工 （改修）医学部保健学科校舎竣工
平成14年度	総長再任（任期2年） 医学系研究科修士課程（看護学専攻ほか）新設 情報連携基盤センター新設 法政国際教育協力研究センター新設 高効率エネルギー変換研究センター新設 附属病院遺伝子・再生医療センター新設 附属病院親と子どもの心療部新設 （学内措置）高等研究院設置 （学内措置）国際学術コンソーシアム（AC21）推進室設置 （学内措置）セクシャル・ハラスメント相談所設置 （学内措置）産学官連携推進本部設置 （学内措置）社会連携推進室設置 （学内措置）男女共同参画室設置 （学内措置）災害対策室設置	国際嚶鳴館竣工 （改修）工学部2号館竣工 （改修）医学部基礎研究棟別館竣工 （改修）文学部・教育学部校舎竣工
平成15年度	情報科学研究科新設 生物機能開発利用研究センター新設 環境学研究科附属地震火山・防災研究センター新設 医学系研究科神経疾患・腫瘍分子医学研究センター新設 医学系研究科医科学専攻（医療行政コース（YLP）の新設） 附属病院医療経営管理部新設 附属病院中央感染制御部新設 （学内措置）訟務室設置 （学内措置）情報セキュリティ対策推進室設置 （学内措置）留学生相談室設置 知的財産部を産学官連携推進本部内に設置	環境総合館竣工 IB電子情報館（西棟、中棟、南棟）竣工 野依記念学術交流館竣工 野依記念物質科学研究館竣工 理学館竣工 高等総合研究館竣工 （改修）附属中学校体育館竣工 （改修）法学部校舎竣工 （改修）医学部基礎研究棟竣工

総長及び副総長の退任のことば

副総長退任に寄せて

副総長 奥野 信 宏



この5年間ほど、国立大学の法人化の検討と作業にかかわってきた。大学教員としては極めて特異の期間であったが、私の専門が公共経済学であり、その点では政策形成のための現場での議論や結論に向けての合意の形成過程など、手前勝手な言い方をお許しいただけるなら、専門での研究を大学教育という私が現場にいる問題について、国立大学協会、文部（科学）省、名古屋大学と実務レベルで体験できた貴重な期間でもあった。

大学を取り巻く社会環境と大学をみる社会の目は、ここ数年のことではあるが大きく変わりつつある。大学一般については、例えば、大学が街に設置されるとき、地域社会が大学に期待することといえば学生がいて街が賑やかになる程度のことであり、それによる地域の知的雰囲気向上などの地域社会に及ぼす効果はほとんど問題にされなかったように感じる。しかし、最近では産学連携や起業、職業人教育など大学と地域社会との連携にかぎらず、さまざまな事柄について大学に地域社会をリードする役割が期待されている。名古屋大学については特にそのことを強く感じる。

国立大学は平成16年4月から国立大学法人になるが、法人化にかかわらず、大学の活動については、簡単には変わってはならないことと、変わらなければならないことの両面がある。名古屋大学については、大学が永続的に持ち続けなければならない核となる価値（コア・バリュー）は、学部教育と大学院における研究者養成、そして基礎研究の遂行だろう。これは、大学の設置形態がどう変わろうとも変わってはならない。そうでなければ大学の存在意義が疑われる。そしてそれらの活動は誰の支配にも服することなく、自主的・自律的に行われなければならない。名古屋大学はいつの時代にあっても、これらの成果の上に立って地域社会、国際社会への貢献を目指すべきである。

一方、現在、社会から期待されている職業人教育、企業との連携研究、大学における起業支援等の地域貢献事業は、大学に付随する価値（サブ・カルチャー）であろう。しかしこのことは、これらが大学にとって大事でないということではない。これらは大学のコア・バリューとなる活動を刺激し、それに貢献するということが、最近の大学では認識されつつある。地域社会や企業も、そうした面での大学の活動に期待を寄せている。

サブ・カルチャーに関連する事業については、規制緩和が鍵である。これまで大学が社会と連携して事業を行うことには、国立大学が国の行政機関であることと教官が国家公務員であるということから厳しい制約があった。教官が民間企業と共同研究する時や外部機

関の会議に出席する時に限らず、国立大学が地方自治体と共同して事業を行うのにも厳しい規制があった。それらは国立大学や研究者が社会の期待する活動を行う時の妨げになっていた。法人化しても教員はみなし公務員であり自由人になるわけではないが、大学の判断で大幅に規制緩和を行う道が拓かれた。

法人化後の新たな意思決定制度は、学外者の意見を大学運営に反映させることによって大学の意思決定を的確かつ迅速なものにすること、大学経営を効率化すること等を目的にしている。しかしそれが実現できるかどうか、逆に学内手続きを煩雑にするだけのことになるかどうかは、大学の自覚と運営の工夫次第であると思う。国立大学法人の制度は、安定的な制度であるとは思わない。数年を経た結果如何によっては、再び設置形態についての議論が起こるのではなからうか。

話が私事に戻って恐縮だが、松尾総長から指名され、平成12年4月に、当時の辻敬一郎副総長（現中京大学心理学部長）の後任として、そのとき既に副総長の職にあられた山下興亜副総長（現中部大学副学長）に助けられながら、副総長の職務を務め始めた。それ以降、途中、平成14年度1年間の総長特別補佐の期間を含めると、4年間にわたって名古屋大学の様々な職務を経

験させていただいた。最初の平成12年度は学務・学生厚生・入試等を担当し、2年目の13年度は総務・キャンパス・国際交流等を担当した。3年目の14年度と4年目の15年度は、名古屋大学における法人化に向けての作業が主な業務になった。

4年間、なんとか仕事をやり続けることができたのは、ひとえに学内各部署と事務局の皆さんのお陰である。特に事務局の皆さんには、夕刻遅い時間からの会議や打ち合わせが定例のごとくなっているにもかかわらず、いやな顔ひとつされず付き合っていた。全く申し訳ないと思っている。

約8年前、経済学部長になってから今日に至るまで、それまでほとんどなかった他の学部の先生方と知り合う機会がでてきた。いろいろな機会に他分野の一線級の研究者の方々と交流し、親しく話できることは望外の幸せであった。私の大学教員生活の大きな糧になっている。

この間、学生、院生諸君と直に接する機会が減ったことについては、内心忸怩たるものがある。4月からは、大学教員としての原点に戻り、本来の仕事に励むつもりである。長い間、ありがとうございました。

（平成16年2月24日）

総長及び副総長の退任のことば

名古屋大学の皆様に感謝して

副総長 伊藤 正之



副総長に就任して、間もなく3年が経過し離任の時を迎えている。副総長の職を離れるに当たって挨拶文をしたためるように言われ、真っ先に浮んだ文言が表題である。私のように何の特徴もない教官が副総長を務められたのは、名古屋大学の皆様の協力があればこそで、感謝の言葉だけが脳裏を占める。私の副総長になって最初の仕事は、7大学共通教育主幹部局長会議への出席であった。これは副総長の仕事というより当時兼ねていた共通教育委員長としての出席であった。それまで、共通教育委員長として、この会議には何度も出席しており、私にとっては、メンバーを含めて馴染みの会議であった。しかし、その時の会議は、以前と違った雰囲気を感じられた。それは、第1回大学評価・学位授与機構の全学テーマ別評価が「教養教育」と決まり、各大学とも実情調査報告の執筆に掛かっているからだと直ぐに気がついた。その時、私も同様に本学の教養教育の調査・分析を行っていた。私に、教養教育ならよくわかっているからと油断があったに違いない。次年度、機構側の評価の途中で、厳しい指摘を受けたことを今も忘れることは出来ない。その後の

関係の教官、事務官の皆さんの涙ぐましい努力に、ただただ頭を下げるのみであったが、皆さんの努力で、本学の面目を保つことが出来、胸を撫で下ろす思いであった。

もう6,7年前になるうか、当時私は、情報文化学部長を務めるとともに、全学共通教育の実施に責任を負う立場にあった。その頃、情報文化学部の大学院重点化と全学共通教育のあり様を考えない日はなかった。情報文化学部の大学院重点化については、同学部と人間情報学研究科を繋げることができ、明るい光がさしこんだと思われた時期もあったが、努力を重ねてもそれ以上の進展は見えて来なかった。本学が大学院部局化の完成を目指していた当時、ひとり情報文化学部にそこに至らないとしたら、情報文化学部に言うに及ばず、本学の教育研究にとって、大きなマイナス要因になるに違いないと考えていた。また、全学共通教育については、大きな制約条件の下で、全学共通教育の出発時点では整合していたかに見えたカリキュラムが5,6年を経て制度疲労が目に見え余るようになっていた。

時を同じくして、本学では、学術憲章とそれに基づくアカデミックプランが検討され始め、アカデミックプランの内容が伝えられる度に、総論的ではあっても、この2つの課題を全学的に解決しようとする気運が高まっていることに意を強くした。この2つには、極めて強い関連があり、解決するとすれば、同時でなければならないと思いつつ、簡単には解決しないであろうことは、過去の例から想像に難くなかった。その時に

は勿論、これらの課題に大きく関わろうなどとは夢にも思わなかった。

私は、副総長就任後直ちにこれら2つの課題に取り組むことになったが、その後2年間で一応の解決を見、3年目には、将来に向けて進展が約束される状況が見られるようになった。これは、総長の強いリーダーシップの賜物であるが、それに加えて当事者間での真摯な検討と全学のバックアップが大きな役割を果たした。

その解決とは、言うまでもなく情報科学研究科の創設及び教養教育院の設置、それに続く全学教育の創生とその全学的な実施体制の確立である。情報科学研究科の創設は、平成13年4月に創設された環境学研究科とともに、文理連携・融合の研究科創設というアカデミックプランの実現であって、情報文化学部・人間情報学研究科の大学院部局化を直接目指したものではないが、結果として、その要請にも十分応えている。

私は、副総長に就任するとすぐに同研究科創設準備委員長を仰せつかり、直ちに同研究科の具体化を急ぐために専門委員会の構成をお願いすることになった。その際、工学研究科を初め全学的な協力が如何に大きかったか今も鮮明に覚えている。同研究科創設までの2年間、順調な時ばかりではなかったが、最終的にいつも全学から強いサポートを頂いたことを懐かしく思い出す。間もなく情報科学研究科の創設1周年を迎え、既に同研究科の教育・研究に融合の兆しははっきり見え始めていると聞き、同研究科の創設に立ち会えた幸せを感じるとともに、本学の皆様に心から感謝の言葉を申し述べたい。

つぎに、全学共通教育の総括から全学教育の創生、

その適切な全学的実施体制、それらを柔軟に且つ確実に保証する教養教育院の設置等について、議論を始める時点では、どのようにして全学の合意形成を図るか、随分悩んだものである。全学教育に対しては、基本設計と実施設計に分けてWGを編成し、基本設計を担当したWGでは、全学共通教育の問題点の把握から全学教育への移行の必然性、教育を受ける立場に立った担当のあり方が検討され、その検討結果は、実施設計を担当したWGに引き継がれた。実施設計を担当したWGでは、基本設計を基に、細部に涉って実施体制が議論され、全学教育が本学の教養教育・基礎教育の中核として機能できる具体的な方策が提言された。両WGの議論の中で、私は、楽観的過ぎると思いつつも、本学の教養教育・基礎教育は、全学教育という形で、他の大学の追従を許さない教育システムに育っていくに違いないとの確信を持った。また、全学教育の議論と並行して、本学のアカデミックプランの実現でもある教養教育院の設置について検討が急ピッチで進み、平成13年12月、本学は日本で初めて教養教育院を持つことになった。その際の全学の強いサポートは、私にとって昨日のここのように今尚新鮮である。その後、両WGから出された提言が全学教育の基本的な枠組みとなり、教養教育院の強いリーダーシップの下に、全学教育が今の姿になったことを心から喜び、今後、不断にその内容の充実に心掛けられることを期待したい。

本学の皆さんに感謝することは、走馬灯のように浮んでくるが、国立大学法人名古屋大学の益々の発展を祈念しつつ、感謝をこめてペンをおきたい。

総長及び副総長の退任のことば

退任に当たって 思うこと、そのままに

副総長 佐々木 雄 太



副総長をお引き受けして2年、ひと言で申して多忙な毎日でした。「無事に」とはまだ申し上げられないまでも、ともかく任期を全うすることができましたのは、皆様のご協力とご支援のお陰です。とりわけ、日々職務を支えてくださった事務職員の方々に御礼を申し上げます。また、はからずも退任と同時に名古屋大学を退職し、新たな職場を得ることになりました。本学に赴任してちょうど20年を数えますが、この間に皆様からいただいたご厚情に心から感謝申し上げます。

思えば、わが国の基幹大学のひとつである名古屋大学の一員として教育・研究に携わることに大きな期待を持って着任したものでした。教育に関して言えば、私は元来、講義やゼミナールが好きでしたし、本学においても楽しくこれを行うことができました。とりわけゼミナールでは、名古屋大学の学生の潜在的能力の高さをあらためて認識することもしばしばありました。研究については、本学の自由な学風の下で、私なりに学界に多少とも貢献する成果を上げることができたと思っています。もちろん課題として自らに課していることはまだまだたくさんあります。研究者養成につい

ては心残りがあります。学位論文執筆途中の5人の大学院生を残して去ることがひとつの心残りです。また、大学院生たちに研究に立ち向かう際の問題意識の希薄さを感じて苛立つことが多かったように思います。この点を克服して、彼らを優れた研究者へと導く手法を発見できずにここまで来たことが心残りの本質的な点です。

本学における20年間の終盤は、法学部長に始まって、法政国際教育協力研究センター長、副総長へと、もっぱら大学行政に携わることになってしまいました。研究から遠ざかることに不安やいささかの焦燥感を抱きながら、しかし、皆様のご支援をいただいて基本的には楽しく仕事を進めることができました。知らない世界を知り、様々な面で自分の関心や価値観を新たにすることができたことは幸せだったと喜んでいきます。法学部長時代は、大学院重点化や法政国際教育協力研究センターの設置をめぐって文部科学省を知り、アジア諸国に対する法整備支援への取り組みを通して外務省、JICA、法務省などに関係が広がりました。また、同窓会を通して、各界で活躍しているキラ星のような同窓生の方々に接することもできました。私にとってもっとも大きな財産は、アジアの体制移行諸国に対する法整備支援の活動を通して得られた体験です。普通であれば訪問する機会があったとは思えないアジアの国々を訪れて見聞を広めることができたこともさることながら、体制移行すなわち社会主義から市場経済へ、権威主義的政治体制から民主主義への移行と、そのため

の法整備を焦眉の課題とする国々の実情から、多くの学問的課題を得ることができました。20世紀における「社会主義」の意義、グローバリゼーションと市場経済の現実的意味、とくに、かの国々にとって社会主義から市場経済への移行が有する意味など、国際政治・現代史研究の根本的な諸問題を考えるなまの現実、なまの素材に接することができました。これを咀嚼し発酵させていくことは今後の課題です。

さて、副総長の任にあった2年間も、私にとっては世界を広げる貴重な体験でした。東山キャンパスの里の一郭から山の上に登ると、名古屋大学の全容がよく見えました。私の所掌が多岐にわたっていたこともあって、名古屋大学の様々な側面を知る機会になりました。与えられた貴重な経験から私なりに考える名古屋大学像について、少し意見を述べようと思います。

この2年間、最も多くの時間を割きエネルギーを消費したのは、言うまでもなく法人化への準備でした。組織改革検討委員会の人事・労務小委員会の責任者として、悪戦苦闘が続きました。大学の自律性、大学の裁量の拡大等々の謳い文句にもかかわらず、法人化への準備を詰めていけば行くほど、その行く手について悲観的にならざるを得ませんでした。もともと国立大学法人化は行財政改革に端を発するものであるから、大学にとってバラ色であるはずがない、とうそぶいてしまえばそれまでです。しかし、ことここに至って不平を言っているわけにはいきません。大学の衆知を集めて法人化に伴う利点を探し、それを生かすほかありません。残念ながら、私にそれが見えているわけではありません。ただ、最も重要なことは、大学の本来の使命である研究・教育の充実という課題を忘れないことであると痛感しています。ついつい、法人化が自己目的化してしまいがちであったからです。研究・教育の充実という点については、名古屋大学は、法人化の掛け声を待つまでもなく、これまで着実な努力を重ねてきたと思います。

里から山に登って知ったことのひとつは、それまでは接することも少なく、さほど関心を持たなかった理系部局の研究・教育の姿でした。とくに21世紀 COE への取り組みを通して、名古屋大学の理系のアカデミック・ポテンシャルの高さを再認識しました。今後の課題は、今陽の当たっている先端的研究部門だけではなく、基礎的な領域を含めた大きな裾野を充実させることであろうと思います。教育については、引き続き全学教育の充実が課題であると思います。学生の感性を養う教育プログラム、専攻領域にとらわれない知的好奇心を育てるプログラムが必要であると感じています。また、大学院大学として、大学院教育システムの改善が大きな課題のように思えます。大学院重点化が進む一方で、教育の体制や手法が新しい状況に対応し切れていないように思います。法人化の後には、社会の中の大学として、その教育実績がいままで以上に問われるのではないのでしょうか。

2年間、他の職務と比較して楽しく進めることができたのは、キャンパス整備に関わる仕事です。東山、鶴舞、大幸だけではなく、東郷の農場や豊川の鬱蒼とした森と史跡を含めて、名古屋大学の多様で魅力のあるキャンパスを知ることができました。この財産の活用には夢があるように思います。地下鉄駅の開業に伴って市民との距離が大きく縮まった東山キャンパスをとってみても、そこに様々な将来構想が生まれつつあります。豊田講堂を中心に野依記念学術交流館を含めた国際交流拠点形成、博物館を核にした「芸術文化プラザ」構想、そして多様な建築物と西のピオトープ、東の里山を包括した「キャンパス・ミュージアム」の構想が生まれようとしています。文字通り社会の中の大学としての、法人化後の名古屋大学の将来像のひとつがここにあるように思います。

最後に、名古屋大学がますます発展充実を遂げ、文字通り中部地区の基幹大学としてその存在感と力量を発揮し続けることを願って、退任の言葉といたします。

総長及び副総長の退任のことば

名古屋大学の新しい発展に向けて

副総長 後藤俊夫



私は、過去3年以上にわたって、全学中期目標・中期計画の策定、高等研究院の設立、産学官連携推進本部・知的財産部の設立、豊橋技術科学大学との再編・統合の協議に、責任者として関わってきました。

私の担当業務のなかでも、名古屋大学の将来にとって最も重要で、大きな意味を持つのは名古屋大学法人化後の中期目標・中期計画の策定であると思います。名古屋大学では、文部科学省の指針等がまだだされていない平成14年4月頃から、目標・計画・評価小委員会を設置して、検討を開始しました。これは、今まで全く経験のない事柄であり、最初は手探りの状態でしたが、高等教育研究センターの池田教授を中核として、メルボルン大学の中期目標・中期計画を参考に、原案を作成してきました。

名古屋大学の中期目標・中期計画は、人材、研究、教育等の9つのドメインからなり、その各々に基本目標・行動目標と中期計画が置かれている、名古屋大学独自のものです。原案作成後は、説明会やセミナーを度々開催し、内容を全学に周知するとともに、部局等からの意見を吸い上げて、全学の協力のもとに中期目

標・中期計画の名古屋大学版を作成することができました。その後文部科学省から作成指針がだされたので、名古屋大学版を転記することによって文部科学省版を完成しました。法人化後は、中期目標・中期計画こそが、大学運営の基本であり、大学の将来を左右するものですが、関係者の方々の協力によって、他大学からも注目されるような中期目標・中期計画を作成することができたと思います。

高等研究院は、組織改革検討委員会の第1小委員会で、平成12年末頃から具体的な構想の検討が始められ、1年以上の全学的な議論を経て、平成14年4月に設立されました。これは、名古屋大学を象徴する世界最高水準の研究を推進する研究専念組織で、他大学にはない特徴ある組織として発足しました。教官構成は、研究院長を含む5名の基幹教官および6名の運営推進委員と、30名前後の研究を推進する流動教官とから成っています。初代高等研究院長は野依良治先生で、流動教官にはそれぞれの分野で世界をリードする研究者が選ばれています。ただ、これまでは中核となる建物もなく、すべての関係教官が分散して活動を進めざるを得ないこともあって、一体感の形成や中身の充実はなかなか難しい状況でした。しかし、本年3月には、高等研究院の本部となる高等総合研究館も完成しますので、今後は研究者間の連帯感も強まり、高等研究院は大きく発展していくものと期待しています。この3月からは、佐藤彰一先生の後を受けて、私が第3代の高等研究院長に選ばれましたので、皆さんの協力を得て、

その発展に微力を尽くしていきたいと考えています。

私が責任者として関わった3番目の大きな担当業務は産学官連携の推進です。近年、20世紀末からの日本の産業、技術、経済の低迷を克服することを目指して、独創的な科学技術の創成と新産業の創出が叫ばれるようになり、それを実現するために産学官連携が国全体の大きな流れとなってきました。名古屋大学でもそれに対応するために、平成14年5月、総長直轄の執行機関として産学官連携推進本部が設置され、私が本部長に任命されました。

産学官連携推進本部の役割は、一言でいえば、全学的な産学官連携活動の統括と推進で、現在までに様々な活動を行ってきました。それらのなかで、学外組織との連携による代表的な成果を挙げると、愛知県や他大学との協力による文部科学省の知的クラスター事業の確保と推進、文部科学省の知的財産本部事業への計画申請と設置、三菱重工等の企業と名古屋大学の包括的連携協定の締結等です。法人化後、産学官連携は、研究成果の社会への還元や外部資金の確保という点で、今までよりもずっと重要性を増し、中期目標・中期計

画と同様、大学の発展を支える中核的活動の一つになると思います。

私のもう一つの重要な担当業務は、名古屋大学と豊橋技術科学大学との統合・再編に関する協議です。これも名古屋大学の将来に大きな影響を与える事柄ですが、国や地元産業界、高専との微妙な関係も考慮する必要があり、なかなか難しい課題です。しかし、現在までの両大学の前向きで誠実な対応により、ゆるやかではありますが、話し合いは着実に前進してきました。そして、最近、豊橋技術科学大学が統合・再編の協議対象を名古屋大学に絞ることを決定したことにより、両大学の話し合いは次の段階に進むことになりました。今後まだまだ克服しなければならない問題や調整すべき課題が多いと思いますが、両大学の間で確立されてきた信頼関係を基に、最終目標に向けての話し合いがさらに進んでいくと信じています。

最後に、名古屋大学の今後の一層の発展を祈念するとともに、今までお世話になった方々およびご支援・ご協力いただいた方々に心からお礼申し上げます。



個別学力検査が実施される

- 志望学部目指して 平成16年度入学者選抜 -

本学の個別学力検査（前期日程）が、2月25日（水）、東山及び大幸地区で行われました。

当日は、青空の広がった穏やかな陽気に恵まれ、豊田講堂テラスやグリーンベルト周辺では、受験生が早くから集まり、引率教師からの試験前の注意事項に耳を傾け、本番に備えていました。また、キャンパスのあちこちで、受験票を片手に緊張した面持ちで来学した受験生に対し、職員や学生が親切に案内する姿も見られました。

試験は、午前9時から始まり、9学部で約4,200人が受験しました。各学部の試験は、5時30分にすべて終了し、受験生は、仲間同士で試験問題について話し合ったりしながら、それぞれ家路につきました。

また、後期日程による試験が3月12日（金）に実施され、前期日程の合格発表が3月8日（月）、後期日程の合格発表が3月22日（月）に豊田講堂前庭で行われました。



試験会場を確認する受験生



試験開始を待つ受験生



合格発表掲示板を見つめる受験生ら



体育会の学生に胸上げされる合格者

平成16年度名古屋大学入学試験受験状況

《前期日程》

学 部	募集人員 (A)	志願者数 (B)	合格者数	倍率 (B)/(A)
文 学 部	100	320	111	3.2
教 育 学 部	53	167	58	3.2
法 学 部	85	286	86	3.4
経 済 学 部	130	424	153	3.3
情 文 学	自然情報学科	22	62	2.8
	社会システム 情 報 学	23	98	4.3
	小 計	45	160	3.6
理 学 部	195	496	214	2.5
医 学 部	医 学 科	75	413	5.5
	保 健 学 科	109	394	3.6
	小 計	184	807	4.4
工 学 部	518	1,371	565	2.6
農 学 部	135	414	146	3.1
合 計	1,445	4,445	1,594	3.1

《後期日程》

学 部	募集人員 (A)	志願者数 (B)	合格者数	倍率 (B)/(A)
文 学 部	25	214	31	8.6
教 育 学 部	12	86	13	7.2
法 学 部	20	335	33	16.8
経 済 学 部	35	284	49	8.1
情 文 学	自然情報学科	10	153	15.3
	社会システム 情 報 学	10	137	13.7
	小 計	20	290	14.5
理 学 部	25	326	34	13.0
医 学 部	医 学 科	10	118	11.8
	保 健 学 科	41	209	5.1
	小 計	51	327	6.4
工 学 部	148	1,126	169	7.6
農 学 部	18	81	18	4.5
合 計	354	3,069	434	8.7

- ・法学部の募集人員には、帰国子女等特別選抜の5人、推薦入学者選抜の40人は含まない。
- ・経済学部及び工学部の募集人員には、大学入試センター試験を課さない推薦入学者選抜の経済学部40
- ・情報文化学部の募集人員には、社会人特別選抜の10人は含まない。
- ・理学部、医学部及び農学部の募集人員には、それぞれ、推薦入学者選抜の理学部50人、医学部60人及
- ・後期日程の農学部は書類選考による。
- ・外国人留学生は含まない。



地下鉄4号線砂田橋・名古屋大学間開通記念 コンサートが開催される

地下鉄4号線砂田橋・名古屋大学間開通記念コンサートが、2月15日(日) 豊田講堂において、本学と名古屋市交通局の共催により開催されました。

このコンサートは、昨年12月の地下鉄4号線砂田橋・名古屋大学駅間の開通を記念して開催されたもので、本学としても地域貢献の一環として取り組み、コンサート以外にも様々な記念講演等を行い、広く市民に本学を知っていただく絶好の機会となりました。

当日は、時折小雨も降る肌寒い天気でしたが、開演

時間の1時間前には、多くの市民が、豊田講堂前に長蛇の列を作り、開演を待ちわびていました。

コンサートでは、抽選により招待された約1,400名の市民が、名古屋フィルハーモニー交響楽団(堀 俊輔指揮)による素晴らしい演奏を楽しみました。演奏曲も、地下鉄開通記念にふさわしく、ポルカ「観光列車」(J.シュトラウス 作曲)等の列車にちなんだ曲が選ばれ、コンサートを盛り上げました。

《プログラム》

ヴェルディ 歌劇「アイダ」より凱進行進曲

ビゼー カルメン組曲第1番

シベリウス 交響詩「フィンランディア」

休憩

スッペ 喜歌劇「軽騎兵」より序曲

J.シュトラウス ワルツ「美しき青きドナウ」

J.シュトラウス ポルカ「観光列車」

ドヴォルザーク 交響曲第9番「新世界より」より
第4楽章

団伊玖磨 「祝典行進曲」(アンコール曲)



開演を待ちわびる長蛇の列



名古屋フィルハーモニー交響楽団による演奏



東海・北陸地区地域貢献シンポジウムが開催される

東海・北陸地区地域貢献シンポジウムが、1月30日（金）金沢大学が主催、本学、名古屋工業大学及び三重大学が共催となり、金沢市内のホテルを会場として「大学の地域貢献が直面する課題」をテーマに開催されました。

このシンポジウムは、地域社会の様々な課題に取り組む国立大学の地域貢献事業の成果等を広く内外に公開するとともに、具体的な連携の在り方について学びあい、社会にアピールする場とすることを目的として実施されたものです。

シンポジウムでは、林金沢大学長からのあいさつの後、消費生活アドバイザーで文部科学省地域貢献事業費選定委員会委員の碧海西葵（あおみ ゆき）氏から、「変貌するこれからの暮らしと大学の地域貢献」を

テーマに特別講演がありました。

続いて、文部科学省地域貢献事業費の採択校による事業内容についての事例発表が行われ、本学からは、坂神社会連携推進室長（総長補佐）が、名古屋大学学術憲章に掲げられている社会的貢献の目標、学内支援体制や各事業の取り組み状況等について、パワーポイントを用いて報告しました。

事例発表後、休憩を挟んで、山出金沢市長による自治体側からの提言や高橋真義桜美林大学大学教育研究所長による「大学の新しいミッション - 地域貢献 - 」と題する提言があり、その後、出席者全員参加によるグループ別討議・発表の場が設けられ、活発な意見交換が行われました。



パネル展示ブース



事例発表を行う坂神社会連携推進室長



平成15年度名古屋大学 卒業・修了留学生を送る夕べを開催

平成15年度名古屋大学卒業・修了留学生を送る夕べが、2月19日（木）シンポジオンホールにおいて開催されました。

この送る夕べは、今春卒業・修了して、進学、就職、帰国する等、本学を巣立っていく40か国、約400名の留学生の今後の活躍を激励、祝福し、相互理解と交流を深め、思い出の一つとなるよう開催されたもので、当日は、留学生、愛知県をはじめとする留学生支援団体、各部局長、指導教官、留学生関係職員等約280名



謝辞を述べる黄雁玲さん



あいさつする松尾総長

が参加して盛大に行われました。

最初に、松尾総長から激励、祝福のあいさつがあり、続いて、名古屋大学留学生後援会からの記念品が、総長から各学部の代表者へ手渡されました。また、来賓を代表して、石田幸男愛知留学生会後援会会長から祝福のあいさつがあり、これを受け、卒業・修了留学生を代表して大学院国際言語文化研究科後期課程3年の黄雁玲（マレイシア）さんから、日本に留学してからの感想を含めた謝辞が述べられました。続いて、

中島副総長の発声により乾杯が行われ、終始なごやかに懇談が進められました。また、留学生が、総長や指導教官を囲んで、にこやかに記念撮影をする姿も見られました。最後に、末松留学生センター長による閉会のあいさつで、名残惜しむなか、送る夕べは終了しました。



懇談の様子



太陽地球環境研究所が 海外で初めての国際会議を開催

太陽地球環境研究所は、2月9日(月)から2月13日(金)までの5日間、ハワイ島のコナで、海外で初めての国際会議「Conference on Sun-Earth Connection: Multiscale Coupling in Sun-Earth Processes」を開催しました。

この国際会議は、同研究所と Johns Hopkins 大学応用物理研究所の共同主催、COSPAR (宇宙空間研究委員会) IAGA (国際地球電磁気・超高層物理学協会) 及び SCOSTEP (太陽地球系物理学・科学委員会) の国際組織と NASA (米航空宇宙局) NSF (全米科学



国際会議の様子

財団)の後援により、太陽コロナ、太陽風、磁気圏過程などに見られるフレアー、太陽風波動、磁気圏尾乱流現象、オーロラ、磁気嵐などのプラズマ不安定/エネルギー放出過程を、複雑性、非線形、自己組織化臨界系、統計、モデリングの手法によって統一的に理解することを目的として開催されたものです。

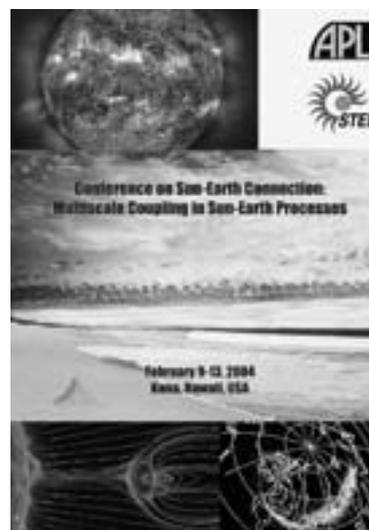
会議には、19か国から98名が集まり、連日夜10時まで熱い議論が展開されました。また、研究発表は、複雑性の定義に迫る哲学的講演から、最新の人工衛星データの紹介と解釈まで多岐にわたり、参加者にとっては、他分野からの新しい知識を吸収する勉強会という一面もありました。最終日の午後には、国立天文台ハワイ観測所からの特別招待により、マウナケア山頂にある「すばる望遠鏡」を見学する機会にも恵まれま



昼食時にも熱い議論をする参加者

した。酸素が薄く、気温マイナス5度、風速15メートル/秒、海拔4200メートルの山頂と気温25度の海辺をわずか2時間で移動するという貴重な経験をすることもできました。

なお、会議で発表された論文は、オランダの Elsevier 社から単行本となって今年中に出版される予定です。



国際会議の発表論文集



年代測定総合研究センターが 第16回タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催

年代測定総合研究センターは、1月22日（木）、23日（金）、シンポジオンホールにおいて、第16回名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、タンデトロン加速器質量分析計による研究成果を報告するために、毎年1回開催されているもので、今回は、研究者や学生など89名の参加のもと、2件の特別講演と21件の一般講演が行われました。

1日目の午前中は、鈴木センター長のあいさつの後、タンデトロンの諸性能と現状に関する報告があり、続いて、宮本一夫九州大学大学院人文科学研究院教授が、青銅器からみた弥生時代の実年代について、J. S. Park 大韓民国ホンゲイック大学教授が、古代鉄製品の冶金学的研究における炭素14年代測定法の応用について、特別講演を行いました。午後からは、古川総合研究資料館1階のタンデトロン加速器質量分析計2号機を見

学した後、タンデトロン加速器質量分析計による炭素14年代測定法を考古学・歴史学・地球科学の分野に応用した研究に関する9件の一般講演が行われました。

2日目は、地球科学・環境科学の分野にタンデトロン加速器質量分析計による炭素14年代測定を応用した研究や古代製鉄遺跡関連遺物の炭素14年代測定等の年代測定法の開発研究に関する11件の一般講演が行われました。

このシンポジウムには、毎年、自然科学はもとより人文科学に至る広い研究分野から参加があり、特に、今年度のシンポジウムでは、23件という多くの講演が行われ、タンデトロン加速器質量分析計による炭素14年代測定法が、ますます多くの研究分野において重要な役割を果たしていることを伺わせました。

なお、同シンポジウムにおいて発表された研究成果は、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書第15号（平成16年3月刊行予定）に掲載されます。



J. S. Park 教授による特別講演



質疑応答の様子



地球水循環研究センターが アジアの水循環に関する 衛星データ利用ワークショップを開催

地球水循環研究センターは、2月3日(火)、4日(水)、東京国際交流館 プラザ平成において、「アジアの水循環に関する衛星データ利用ワークショップ」を開催しました。

このワークショップは、同センターが文部科学省科学技術振興調整費「我が国の国際的リーダーシップの確保」プログラムに、宇宙航空研究開発機構(JAXA)とともに提案し採択され、JAXAがその実施課題として主催した「統合地球観測戦略(IGOS)に係る世界会議」(2月4日～6日開催)に先立って開催されたものです。

ワークショップでは、アジア各国(バングラデシュ、マレーシア、フィリピン、ミャンマー、ネパール、モンゴル、ラオス、ベトナム、インドネシア)及び日本の参加者から、雲、砂嵐、森林火災、洪水等の現状把握に係わる衛星データ利用、洪水や台風等の短期情報、エルニーニョ予報、氷河縮小、永久凍土の変化等について発表がありました。参加者の多くが気象現業官署に所属していたことから、河川管理、国土保全等の立場からの発表は余りありませんでした。また、多くの参加者が、将来の全球降水観測計画(Global Precipitation Measurement: GPM)への期待を表明しました。GPMは、3時間毎の全球降水マップを出力することを目的としており、現況把握、短時間予報等へ大きな寄与が期待されています。将来の協力の枠組みについては、国際的な統合地球観測戦略の「水テーマ」の枠組みや現在進行中のアジアモンスーンエネルギー・水循環観測研究計画(GAME)の後継計画の紹介等がございましたが、今後の課題とされました。



オープニングで講演を行う中村地球水循環研究センター長



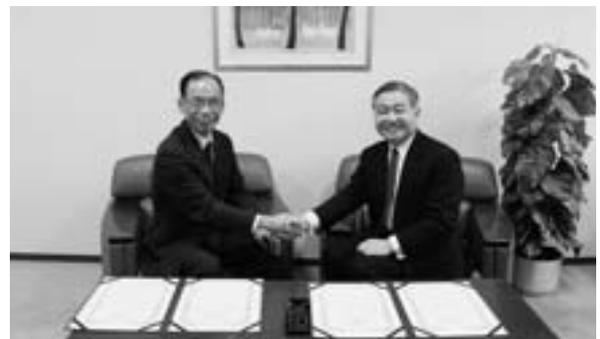
大学院多元数理科学研究科が 韓国高等科学院数学部と 学術交流協定を締結

大学院多元数理科学研究科は、2月26日(木)、浪川研究科長と Hyo Chul Myung 韓国高等科学院(KIAS)教授部長が学術交流協定書に署名し、同協定を締結しました。

KIASは、1996年10月1日に基礎数理科学の育成を目的に韓国の科学技術省によって設立され、現在、数学、物理学及びコンピュータ・サイエンスの3部門で構成されています。また、毎年数々のワークショップを開催し、年間200名余りの訪問研究者を迎えるなど、国際的な研究所として活発な活動を行っています。

KIASと同研究科の間では、代数幾何学における共同研究をはじめとした相互の研究者の交流が活発に行われてきました。平成14年度には、代数幾何学をテーマとした日韓共同の研究集会を開催し成功を収めました。これを機に、代数幾何学に限らず広い分野での相互交流が望ましいと両者間の合意がなされ、今回の締結に至ったものです。

今回の学術交流協定の締結により、研究者の交流、学術資料・情報の交換及び研究集会の共同開催などを通して、数理科学分野における学術交流がさらに拡充され、両国における研究の発展につながるが大いに期待されます。



学術交流協定を締結する浪川研究科長(右)と Hyo Chul Myung 教授部長(左)



博物館が第30回特別講演会を開催

博物館は、第30回特別講演会として、2月5日（木）奥山 剛生命農学研究科教授による「木を使うことは悪いことか? - 真の循環型社会をめざして - 」と題する講演会を開催しました。

講演会で、奥山教授は、環境破壊と思われがちな木材の利用拡大が、地球環境の保全にいかに必要なかという一見矛盾する内容を、一般市民に分かりやすく説明しました。奥山教授は、グラフ、図及びアマゾンやインドネシアの写真を使いながら、「地球温暖化を防ぐためには大気中の二酸化炭素量を減らす必要があるが、木を育てることで二酸化炭素の固定量を増やし、その木を建材などに使うことによって、二酸化炭素を長く貯蔵することが大切である。また、そのための木を育てるには、熱帯・亜熱帯がコストも低く、効率もよい。人工林は熱帯天然林の破壊につながると誤解されがちだが、現在の熱帯林破壊の主な要因は、経済的価値のない森林の大規模焼き畑による農地や牧場への転換であり、このような4、5年すると新たな森林を破壊しなければ成り立たない産業と違い、すでに破壊された場所を人工林として長期利用すれば、天然林を破壊しない経済システムを作っていくことも可能である。」などと述べられ、熱帯・亜熱帯人工林の重要性を訴えました。

参加した約80名の市民は、地球環境と人工林、そして大学の研究とのつながりについて、真剣に聴講し、講演後、多くの質問が寄せられました。また、講演会終了後にも、個人的に奥山教授に話を聞く人や、館内の展示木材標本を改めて見学する人の姿も見られました。



講演する奥山教授



農学国際教育協力研究センターが 第4回オープンセミナーを開催

農学国際教育協力研究センターは、2月24日（火）、2003年度第4回オープンセミナーとして、JICA プロジェクト「ナミビア大学強化支援計画」に関する報告会を、同プロジェクトの長期専門家として一昨年1月末から今年1月末までの2年間、ナミビア大学農学部へ赴任していた加藤由美子氏を講師に招いて開催しました。セミナーでは、まず、「ナミビア大学農学部強化支援計画」の概要が紹介され、多数の外国人教授で支えられている現在の農学部教授陣を、1日も早くナミビア人による教授陣に変えていくため、作物生理学、養鶏及び統合環境科学のナミビア人教員3名を対象に、自国の農業にとって必要度の高いと目される研究課題を自ら見つけ出し、試験研究の計画を立案及び実施しうる力量を身につけさせることが、同プロジェクトの達成目標とされました。加藤氏は、2年間の活動を通じ、ナミビア人教員に対する研究計画作成のための指導、日本からの短期専門家の受け入れ及び農学部執行部との協議など、同大学農学部でナミビア人教員が自立して研究活動を展開できるようにするための支援活動等について話しました。続いて、北川勝弘同センター教授が、昨年11月に同プロジェクト終了時評価団長として参加した調査結果に基づき、プロジェクトの目標は、3名ともJICA 専門家の指導を受けながら博士課程に登録し、博士号取得を目指す研究計画が大学側に受理されたことでほぼ達成されたと考えられると報告しました。今回のセミナーには、22名が参加し、同プロジェクトの日本にとってのメリットは何かなど、率直な質問や意見が数多く出されました。



オープンセミナーの様子



平成15年度名古屋大学語学研修が終了

昨年4月11日から実施していた「名古屋大学語学研修（英語上級）及び（英語中級）」の全ての日程が、2月4日（水）をもって終了しました。

この研修は、本学の国際交流・留学生担当及び今後英語能力を必要とする職員に対して、英語応用能力の増進を図り国際化に対応した職員を養成することを目的として、大学院国際言語文化研究科の協力の下、同研究科が全学向け授業として開講している「外国語特別研修コース（英語上級）及び同（英語中級）」に学生・留学生と一緒に参加する形態で実施しているものです。研修には、全学から7名の職員が参加し、講師として、英語上級の前期はM. C. Weeks氏、後期はE. T. W. Haig氏、英語中級の前期はF. M. Webster氏、後期はD. Ramsey氏の外国人教師にお願いしました。

授業は、即興劇を行って英語に慣れ親しむ一方で、英語で世界的問題を考えディスカッションを行う等、学生と共に刺激を与え合いながら勉強し、会話能力を高めました。

また、2月3日（火）及び4日（水）の2日間、特別補講として外国人教師から実務に役立つ英会話の研修が行

われました。最後に、渡辺美樹国際言語文化研究科助教授を交え、研修生一人一人から、研修に対する感想、感謝の気持ち、今後も勉強を続けていきたい等のスピーチが行われました。

留学生・海外からの研究者が増加している現在、ますます英語の必要性が大きくなってきており、今後の職務や国際交流に役立つことが期待されます。

修了者

（英語上級）

理学部・理学研究科・多元数理科学研究科庶務掛	加藤さち子
理学部・理学研究科・多元数理科学研究科	
多元数理科学研究科図書室	小崎 和子
環境学研究科・地球水循環研究センター庶務掛	岡田佳代子

（英語中級）

学務部学務課全学教育教務掛	伊藤紗奈恵
工学部・工学研究科総務課庶務掛	浅井 佳美
工学部・工学研究科教務課専門職員	安藤 元良
工学部・工学研究科教務課教務掛	近藤 邦弘



英語でスピーチする研修生



語学研修終了後の記念撮影

 INFORMATION 

イベント等の開催予定一覧

イベント	日時	概要	連絡先
第7回博物館特別展	3月17日(水)~7月30日 (金)10時~16時	テーマ：名古屋大学研究・教育を支えた匠の技 場 所：博物館 休館日：月、火曜日 ただし、祝休日は開館	博物館事務室 052 - 789 - 5767
2004年春季附属図書館特別展	3月23日(火)~4月21日 (木)10時~17時(3月25日は休館)	テーマ：和歌(うた)の書物 - 新古今和歌集とその周辺 - 場 所：附属図書館展示室	附属図書館情報管理課庶務掛 052 - 789 - 3667 附属図書館研究開発室・秋山助手 052 - 789 - 3697
2004年春季附属図書館特別展 ギャラリートーク	4月17日(土)13時~15時 (予定)	テーマ：新古今和歌集とその時代 場 所：附属図書館多目的室 講 師：田中喜美春文学研究科教授、 島田修三氏(歌人、愛知淑徳大学教授)	附属図書館情報管理課庶務掛 052 - 789 - 3667 附属図書館研究開発室・秋山助手 052 - 789 - 3697
第7回博物館特別展関連講演会	4月22日(木)15時~16時 30分	場 所：博物館講義室 講演者：増田忠志理学部技術部第一装置開発班技術班長	博物館事務室 052 - 789 - 5767
中学生のためのネイチャーウォッチング	5月8日(土)	野間海岸にて野外実習(一般公募)	博物館事務室 052 - 789 - 5767
第7回博物館特別展関連講演会	5月20日(木)15時~16時 30分	場 所：博物館講義室 講演者：鈴木年代測定総合研究センター長	博物館事務室 052 - 789 - 5767

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（16年2月分）

	記事	月日	新聞等名
1	名古屋市の04年度予算案編成 竹内信仁・経済学研究科教授は敬老バスの見直しを提言	2.1(日)	朝日(朝刊)
2	本学で研修中のイラク人医師2人 復興支援まず医療を「庭が墓場」実情訴え	2.2(月)	朝日(朝刊)
3	名大サロンの主役：宝谷紘一・理学研究科教授 「したたかで華麗なる生物分子機械」と題し講演	2.3(火)	中日(朝刊)
4	名古屋大学博物館特別講演会 奥山剛・生命農学研究科教授が講演	2.3(火)	中日(朝刊)
5	学生街ダンス：実験大好き 楽しく没頭できる 3年・丹羽亜衣	2.3(火)	中日(朝刊)
6	名古屋共立病院のロボット手術100例を越す 同病院リウマチ・人工関節センター長・岩田久・本学名誉教授による現状報告	2.3(火)	読売
7	年代測定総合研究センター 小田寛貴・同センター助手らが導入した古筆切 AMS 技術で真層解明	2.4(水)	中日(朝刊)
8	小林猛・工学研究科教授らが開発した新がん治療法「温熱免疫療法」実用化へ向け会社設立 10日に治療法を紹介するシンポジウムを開催	2.5(木) 2.6(金)	日刊工業 中日(朝刊)
9	「県科学技術会議」(座長：松尾稔・本学総長) 産学官の研究を提唱	2.5(木)	中日(朝刊)
10	老年学：井口昭久・医学系研究科教授 父の最期、無力な自分	2.5(木)	朝日(朝刊)
11	国立大学2次最終出願状況 本学、倍率は微増 理学部後期の志願は昨年の4倍	2.5(木)	毎日(朝刊)
12	本多裕之・工学研究科助教授 「工学部の研究は実学」産学連携でシーズを製品化	2.6(金)	日刊工業
13	コーナーキック：金井篤子・教育発達科学研究科助教授 現実に向き合うこと	2.6(金)	中日(夕刊)
14	アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授 作品の想像力と戦争	2.6(金)	朝日(夕刊)
15	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 フランクリンの法則	2.7(土)	日経(夕刊)
16	金融早期健全化法 割れる評価十分審議を 家森信善・経済学研究科教授	2.7(土)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
17	平和構築シンポ 国際開発研究科平和構築研究グループ(代表：佐藤安信・国際化開発研究科教授)が主催	2.8(日) 2.10(火)	中日(朝刊)
18	生命農学研究科教授会が研究科長に松田幹教授を選出	2.10(火)	中日(朝刊)
19	訃報：武田喬男名誉教授 9日死去	2.10(火)	中日(朝刊)
20	武田一哉・情報科学研究科教授、大日方五郎・先端技術共同研究センター教授の2研究チーム 会話ロボット実用化へ	2.10(火)	日経(朝刊)
21	経済教室：家森信善・経済学研究科教授 地域金融・中小企業貸し出しの強化 信用情報の充実もカギ	2.10(火)	日経(朝刊)
22	名古屋大 COE オープンレクチャー 宮治昭・文学研究科教授が講演	2.10(火)	中日(朝刊)
23	キャンパスベンチャーグランプリ CHUBU 奨励賞受賞者：池田誠一・大学院生、松田成広・大学院生ら	2.10(火)	日刊工業
24	博物館は寄贈を受けて修復した180年前の血管分布図「栄衛中経図」を公開	2.11(水) 2.12(木)	毎日(朝刊) 他4社
25	NPO 法人「先端医療を推進する会」(代表理事：岩田久名誉教授) 結成フォーラム「先端医療ってなーに」を本学シンポジウムで開催	2.11(水) 2.17(火)	中日(朝刊) 日経(夕刊)
26	公立高校、合否情報無断提供 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授 「使用目的を制限し、使用後はデータを破棄すると予備校に約束させるべき」	2.11(水)	朝日(朝刊)
27	東海4県のNPOなど37団体が本学で交流会 テーマは「顔の見える関係づくり」 福和伸夫・環境学研究科教授による講演など	2.12(木)	毎日(朝刊) 朝日(朝刊)
28	博物館「野外観察園」 珍しい植物や昆虫を紹介する写真展	2.13(金)	中日(朝刊)
29	透明で加工簡単な超撥水膜をつくる新技術を高井治・理工学総合研究センター教授らが開発	2.13(金)	日経(朝刊)
30	「名古屋大学星の会」が「素粒子と宇宙・研究の最前線から」を開催 菊川芳夫・理学研究科助教授、福井康夫・理学研究科教授らが講演	2.13(金)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
31	高齢者排せつケアシンポジウム 中井滋・医学系研究科助手による 講演など	2 .13(金) 2 .17(火)	中日(朝刊) 日経(夕刊)
32	市営地下鉄名城線 平成16年10月、 名古屋大学・新瑞橋間が開通し、 全国初の環状運転を始める	2 .13(金) 2 .14(土) 2 .18(水) 2 .19(木)	中日(夕刊) 他3社
33	民主党県連は人材を育成する 「リーダーズカレッジ」を4月に 開講 カリキュラム委員長に後房 雄・本学法学研究科教授	2 .14(土)	毎日(朝刊)
34	あすへの話題：池内了・理学研究 科教授 パームオイル	2 .14(土)	日経(夕刊)
35	愛知県 公営企業として4月発足 する「病院事業庁」の病院事業庁 長に外山淳治・本学名誉教授	2 .15(日)	中日(朝刊)
36	時のおもり：池内了・理学研究科 教授 ウイルスの逆襲 複雑化した 現代の文明病	2 .16(月)	中日(朝刊)
37	超電導現象を利用した超高速プロ セッサの開発に藤巻朗・工学研 究科助教授らの研究グループが世 界で初めて成功	2 .17(火)	中日(朝刊) 他3社
38	研究室発：山岡耕春・環境学研 究科教授 地震学・火山学 地下構 造の変化つかむ	2 .17(火)	中日(朝刊)
39	或るバイト：家庭教師 3年・藤 井亜矢子	2 .17(火)	中日(朝刊)
40	高等研究院長に後藤俊夫教授、教 養教育院長に若尾祐司教授を選出 各教授会が次期部局長5人を選出	2 .18(水)	中日(朝刊)
41	嶋田義仁・文学研究科教授のグ ループが不用になった眼科検査機 器をアフリカ・カメルーンへ寄贈	2 .18(水)	中日(朝刊)
42	県推進委が初会合 在外外国人が まちづくりの意見交換 徐英淑・ 本学大学院生などが出席	2 .19(木)	読売
43	中日新聞が開催する「2004年国際 シンポジウム」講師の横顔 奥野 信宏・本学副総長	2 .19(木)	中日(朝刊)
44	外国人が話す日本語サロン 講師 は国際開発研究科のアレクサンド ル・マンギン	2 .19(木)	中日(夕刊)
45	教育学部教授会は附属中学・高等 学校長に吉田俊和教授を選出	2 20(金)	中日(朝刊)
46	ニッポン見聞録：韓秀蘭・大学 院生 同じ「はし文化圏」でも料理 文化の違い	2 20(金)	朝日(夕刊)
47	三菱重工と中部地区では初の相互 提携を結ぶ 研究や人材育成で連 携	2 21(土) 2 24(火)	読売 他5社
48	なごや考：名古屋大学 “7番目” の挑戦④⑤	2 21(土) 2 22(日) 2 23(月)	毎日(朝刊)
49	あすへの話題：池内了・理学研究 科教授 真冬の大雪	2 21(土)	日経(夕刊)

	記 事	月 日	新聞等名
50	浪川幸彦・多元数理科学研究科長 の数楽、数が苦：四次元の世界 直感の間違いを示す事実	2 23(月)	中日(朝刊)
51	「全国中高一貫教育研究大会」シ ンポジウム本学で開催 矢木修・ 本学附属校副校長「どう課題を解 決していくかが大切」	2 23(月)	中日(朝刊)
52	名古屋・現代と文学を考える会例 会 山本芳幸・法学研究科助教授 が講演	2 21(土) 2 23(月) 2 25(水)	中日(朝刊) 朝日(夕刊)
53	沢田昭二名誉教授 ピキニ水爆実 験 被爆者の追悼式典で演説	2 23(月) 2 29(日)	日経(夕刊) 中日(朝刊)
54	知的財産部創設記念シンポジウム 「名古屋大学の知的成果を社会へ」 を開催 毛利佳年雄・工学研究科 教授の講演など	2 24(火)	中日(朝刊)
55	教育シンポ「生きる力をはぐくむ 中等教育」工学部で開催	2 24(火)	中日(朝刊)
56	予知最前線：GPSが観測した 「スロースリップ」東海地震の前 兆に似る 木股文昭・環境学研 究科助教授「結果はいずれ収まる という予測で一致」	2 25(水)	毎日(朝刊)
57	「スロースリップイベントに関する 国際シンポジウム」が本学で開催 山岡耕春・環境学研究科教授「ス ロースリップの追究は地震発生の メカニズム解明には欠かせない」	2 25(水)	毎日(朝刊)
58	講座「私流ライフステージ～自分 らしい選択が可能な社会に向け て」講師：金井篤子・男女共同 参画室長	2 25(水)	中日(朝刊)
59	気象庁は「緊急地震速報」の試験 運用を開始 本学など10機関に提 供	2 25(水) 2 26(木)	朝日(夕刊) 読売
60	東海の国立大学二次試験 身近な 問題から出題するなどユニークな 問題が出題された	2 26(木)	中日(朝刊) 毎日(朝刊)
61	訃報：元本学文学部助教授・網野 善彦氏 27日死去	2 27(金) 2 28(土)	朝日(夕刊) 他3社
62	ニッポン見聞録：陳芬慧・大学 院生 日本の「資格」文化	2 27(金)	朝日(夕刊)
63	糖尿病と痛風講演会 坂本信夫名 誉教授らによる講演	2 28(土)	朝日(朝刊)
64	あすへの話題：池内了・理学研究 科教授 ALMA	2 28(土)	日経(夕刊)
65	国立長寿医療センター初代総長に 大島伸一・本学医学部附属病院長 が就任	2 29(日)	朝日(朝刊)
66	地球だいすき：森川高行・環境学 研究科教授 ITSに託す街の未来	2 29(日)	中日(朝刊)
67	末永康仁・情報科学研究科教授、 武田一哉・情報科学研究科教授と 豊田中央研究所の研究チームが唇 の動きで音声認識の精度を高める 技術を開発	1 .9(金)	日経産業新聞

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話：052（789）2016

FAX：052（789）2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

②③古川為三郎・志ま夫妻記念プレート

本連載第9回(No.116)でも述べましたように、本学東山キャンパスの古川総合研究資料館(旧古川図書館)は、故古川為三郎(日本ヘラルド映画株式会社社長)・志ま御夫妻から建設資金の寄付をいただいて、1964年に建てられたものです。

附属図書館の建設経費は約2億円と見積もられ、地元官民各界から資金援助をうけて建設する計画でしたが、なかなか資金繰りがつきませんでした。そのようななか当時(1962年頃)の名古屋市水道局長・松見三郎さんが、千種区長時代に親交のあった古川為三郎さんのご自宅(千種区内)にお願いに上がり、為三郎さんは2億円のうち1億円の寄付を約束されました。当時事業を拡大していた為三郎さんには、個人で援助できる金額としては、1億円がやっとだったようです。

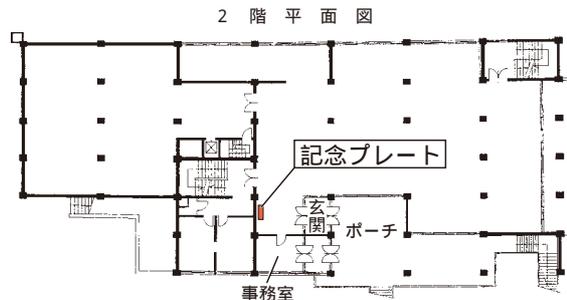
ところが松見さんが帰宅した後、為三郎さんの妻志まさんが、残りの1億円について「その1億円私が出しましょう。大学の図書館といえば、明日の日本を背負う若い人が勉強するところです。そんな人を育てるなら、私の財産など惜しくもありません。さあどうぞ使ってください。」と、預金通帳・株券などをご自分の金庫から持ち出されました。これに対し為三郎さんは「これは、元へ戻しときなさい。わしは土地を売ってでも、合計2億円にして、名大へ渡そう」と答えたそうです。

翌日、当時の名古屋大学総長勝沼精蔵が古川さん宅を訪ね、あらためて寄付の話を受けました。勝沼総長が帰ったあと、古川さん宅の玄関には勝沼総長の靴がそのまま残っていたそうです。1億円と思っていたのが2億円全額と、そこで初めて聞いた勝沼総長が喜んで帰った様子が推測されます(以上、小橋博史『獅子奮迅 古川為三郎伝』より)。

旧古川図書館=現在の古川総合研究資料館(博物館)を玄関から入ると、正面の壁に古川為三郎・志ま御夫妻の記念プレートが掲げられています。そこには「この図書館は本学の教育と研究に資するため古川為三郎氏、志ま夫人の篤志によって寄贈されたものである」と、志ま夫人の名前も刻まれており、このエピソードの信憑性を印象づけています。



記念プレート



博物館内図面



東山キャンパス



古川為三郎・志ま夫妻(1960年頃)

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物等に関する情報をお持ちでしたら、
大学史資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡下さい。